

高等学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

平成 6 年 度

教育研究員（高校・地理歴史）名簿

科 目	所 属	氏 名
日 本 史	都 立 上 野 高 校	小 賀 野 勝 芳
	都 立 足 立 西 高 校	金 澤 利 明
	都 立 上 野 忍 岡 高 校	宮 本 久 也
	都 立 城 東 高 校	山 中 豊
	都 立 小 岩 高 校	森 晋 一 郎
	都 立 三 鷹 高 校	外 澤 直 之
世 界 史	都 立 志 村 高 校	前 田 達 見
	都 立 武 蔵 村 山 高 校	長 雅 洋
	都 立 東 大 和 高 校	宮 本 秀 樹
	都 立 小 平 南 高 校	山 下 弘 之
地 理	都 立 蔵 前 工 業 高 校	小 川 純 子
	都 立 江 戸 川 高 校	杉 岡 道 夫
	都 立 永 山 高 校	佐 藤 安 弘

担 当

教 育 庁 指 導 部 主 任 指 導 主 事 天 井 勝 海
 教 育 庁 指 導 部 主 任 指 導 主 事 飯 田 國 雄
 教 育 庁 指 導 部 高 等 学 校 教 育 指 導 課 指 導 主 事 上 原 徹

目 次

研究主題 国際化する社会と異文化への理解を深める授業展開の工夫
－生徒の実態に合わせた教育メディアの工夫－

主題設定の理由と研究の経過	2
I 明治期の欧州における日本観 －ビゴー・ワーグマンなどを題材として－	3
1 19世紀後半の欧州における日本観	3
2 博覧会の時代 －その社会的、歴史的意義－	4
3 日本の近代化の過程にみる上野公園	6
4 明治の日本と日本人を描いたフランス人画家・ビゴー	8
5 近代ジャーナリズムの成立とその影響	9
II 民族共存への取り組み	11
1 パレスチナにおける共存の試み	11
2 人種共存社会 －南アフリカ共和国を事例として－	13
3 ベルギーにおける民族共存	14
III 地域の文化的特性の考察	16
1 フィリピンの食文化 －異なる食文化の受容－	16
2 「世宗」の事績 －ハンゲル（創民正音・大いなる文字）創製を中心として－	18
3 近代の北海道とアイヌ民族 －明治政府による同化政策－	20
4 東京における大正～昭和初期の生活文化 －ある俸給生活者の一日－	21
5 アメリカニズムの解読	23

研究主題 国際化する社会と異文化への理解を深める授業展開の工夫
—生徒の実態に合わせた教育メディアの工夫—

主題設定の理由と研究の経過

人の国際化が急速に進展する現代の日本社会では、異文化との接触機会が増大し、多様な文化を受容し理解を深めることが求められている。そこで、本部会では、真の国際理解に基づき、望ましい交流のできる生徒の育成を目指し、明治期の欧州における日本観、民族共存への取り組み、地域の文化的特性の考察、三つの視点から研究主題に迫ることにした。また、生徒の能力や価値観などの多様化の進展の中で、学習指導での個性化・特色化が一層求められている。そこで、学習内容の工夫と合わせて、生徒の実態に合わせた教育メディアのより一層の活用も試みた。なお、本部会は教育メディアを、地図・年表・各種統計・年鑑・白書・新聞・読み物・その他の資料及び各種教育機器など、広くとらえた。

I 明治期の欧州における日本観 —ビゴー・ワーグマンなどを題材として—

欧米など世界の国々における日本社会への認識は、近代化の始まった明治時代から、欧米列強と対立した第二次世界大戦までの時期に比べると大きく変化した。日本は、かつて欧米より「ジャポニスム」や「黄禍」などのイメージを付与され、真の理解を得られていなかった面もあった。しかし、逆に、現代の日本は、世界の国々に対して、同様に一面的理解をしているところもある。そこで、このグループでは、明治期の日本と欧州との交流の中で描かれたビゴー・ワーグマンの素描を素材として、明治期の欧州における日本観を、「19世紀後半の欧州における日本観」「博覧会の時代」「近代化の過程にみる上野公園」「明治の日本と日本人を描いたフランス人画家・ビゴー」「近代ジャーナリズムの成立とその影響」の五つのテーマを通して、歴史学習の中で考察させ、異文化に対する理解を深めさせる授業展開の工夫を試みた。

II 民族共存への取り組み

冷戦終結以後の世界各地で多発する民族問題を理解するには、政治・経済制度などの視点からの考察ばかりではなく、宗教、言語、歴史的経験などを背景として形成される民族文化や民族意識への認識を深めることが重要である。そこで、このグループでは多発する民族問題の中で、特に、民族の共存を指向しつつある地域に注目し、「パレスチナにおける共存の試み」「人種共存社会」「ベルギーにおける民族共存」の三つのテーマを取り上げ、民族のもつ多様な文化的な価値観や意識を理解させるとともに、その解決の方策を考察させ、国際化する日本社会において異文化理解を深めさせる授業展開の工夫を試みた。

III 地域の文化的特性の考察

国際化する現代の世界において、各地域の文化は表層面で同質化する一方、基層面では地域の独自性が存在し、文化の重層性が一層進展している。国際社会に生きる生徒は地域文化の独自性と同質性を認識し、地域文化を様々な面から再発見、再評価することが大切である。そこで、このグループでは、地域文化の持つ多面性に注目して、「フィリピンの食文化」「世宗の事績」「近代の北海道とアイヌ民族」「東京における大正～昭和初期の生活文化」「アメリカニズムの解説」の五つのテーマを取り上げ、異文化を実感的に理解させる授業展開の工夫を試みた。

I 明治期の欧州における日本観 - ビゴ-ワグマンなどを題材として -

1. 19世紀後半の欧州における日本観

- (1) 教材として取り上げた理由 19世紀後半の欧州における日本観は、明治維新以降の近代化の推進における「後進国の優等生」時代、それとは逆に、日清戦争後の欧米列強に強い警戒感を与えた「黄禍」時代に大別される。近代化の推進による日本の強国化が、欧米列強のアジア諸国への進出と利害対立し、また、日本などアジア諸国への人種的偏見を助長したとするならば、「黄禍論」は、19世紀後半の日本などアジア諸国に対する偏見を伴った理解であると言える。こうした、19世紀後半の欧州における一面的な日本理解は、現代の日本社会におけるアジア・アフリカなど発展途上国に対する理解と同じ様な構図を描いている面もある。そこで、ビゴ-ワグマンの素描を素材に、欧州から見た日本の近代化の姿を理解させるとともに、「黄禍論」の背景や当時の国際社会への影響を考察させることを通して、国際化する日本社会における、真の相互理解に基づく国際交流への認識を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時ではドイツ皇帝ヴィルヘルム2世からロシア皇帝ニコライ2世に贈られた「黄禍の図」と手紙を紹介し、19世紀後半の欧州における黄禍論の発生が、明治期の日本への理解にどのように影響したかを考えさせる。また、黄禍論が生まれた背景や、基本的な考え方についての認識を深めさせることを通して、現代の人種問題などを考察させる。なお、本時は「日本の近代化と国際交流」の中で取り上げ、「ビゴ-ワグマンの素描集から見た欧州における日本観」、「アジア・アフリカにおける帝国主義の進展」、「上野の地域調査」の4時間構成の第2時限にあたる。新学習指導要領では、「世界史A」の「(3) 19世紀の世界の形成と展開」の「(ウ)アジア諸国の変貌と日本」、「世界史B」の「(5) 近代と世界の変容」の「(ウ)アジア諸国とヨーロッパの進出」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学習活動	備考
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習 ・明治期日本への欧州のイメージ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ビゴ-ワグマンの素描プリントについてのコメントを発表し、共通理解を図る。 ○ワークシートの作業を通して、授業における基本的事項を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素描プリント ・ワークシート配布
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・「黄禍論」の発生 ・日本における欧州理解 	<ul style="list-style-type: none"> ○「黄禍の図」と「ウィリーからニキへの手紙」を紹介し、黄禍論についての歴史的背景を理解する。 ○明治期の日本における知識人・政治家・官僚がどのような欧州理解をしていたかに着目する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・資料「黄禍の手紙・図」 ・資料「行人」「それから」「親独家」

展 開	・日本における外国風俗の流行	○明治期の日本における、外国風俗の流行について理解する。 ①色眼鏡の流行の背後にある国際的な問題について ②色眼鏡の流行を通して見た明治期の日本人の意識	・ワークシート ・資料「日本人像のルーツ」「ドイツ皇太子の来日」「色眼鏡」
	・「黄禍論」の国際的な影響と目的	○英国により保護国化されていたエジプト人の心情を通して、アラブ諸国の人々の意識を理解し、「黄禍論」が与えた民族独立運動への影響を考察する。	・資料「日本の乙女」 ・ワークシート
ま と め	・「黄禍論」の変化	○「黄禍論」による最初の外交上の影響が三国干渉であったことを理解する。 ○日露戦争前後、各種マスメディアにより流入した日本についての大量の情報が、欧米における「黄禍論」を変質させたことを理解する。	・資料「日清戦争」「列強」「西洋への道」 ・ワークシート作業

(4) 評価の観点 ①19世紀後半の欧州における日本観の形成を、ビゴー・ワグマンの素描を通して考察することができたか。②19世紀後半におけるマスメディアの報道の様子を通して、明治期の日本がどの様に理解され、また、外国をどの様に理解したかを認識することができたか。③「黄禍論」が、列強の植民地主義に対するアラブ諸国の民族意識の昂揚と独立運動にも結びついていることを理解することができたか。④各種のマスメディアを通して伝えられた「黄禍論」が、日本人にどのように理解され、また、日本の対外発展にどのように影響したか理解できたか。

(5) 指導上の留意点 ①日本における外国風俗の流行の指導は、単に色眼鏡の流行にとどまらず、色眼鏡を着用した明治の知識人・政治家・官僚に対する外国人の評価にも触れ、多角的に把握させるように配慮する。②ワークシート作業では、できるだけビゴー・ワグマンの素描を活用して実感的イメージをわかせるよう配慮する。

2. 博覧会の時代 -その社会的、歴史的意義-

(1) 教材として取り上げた理由 19世紀後半から20世紀前半は、欧米の産業・技術・文化が広く世界に行き渡った時代であるとともに、博覧会の時代ということもできる。1851年のロンドン万博を契機として、19世紀後半、欧米各地では平均して約4年毎に万国博覧会が開催された。欧米各国は、万博開催により各国へ産業製品や先進の科学技術を広めたり、また、万博を国内の産業界、経済界の発展の契機などにした。さらに、新たに獲得した植民地の物産等を紹介したり、植民地の人々を連れて来てその集落を再現した展示等も行った。明治維新後、近代国家の歩みを始めた日本は、積極的に欧米の万博に参加するとともに、国内でも多くの内国勸業博覧会を開き、欧米の科学技術、産業、生活様式を紹介するなどして殖産興業政策の一環とした。日本の万博への参加は、ジャポニズムに見られるように、欧米におい

て日本の伝統文化に対するブームを引き起こした。また、国内で行われた、博覧会は見世物、レクリエーションとしての要素も多く、庶民の好奇心を引きつけ、娯楽の場として大いに盛況を博した。そこで、博覧会に登場した様々な展示品や事柄を事例として、博覧会を通して行われた国際文化交流の社会的意義、歴史的意義を理解させるとともに、明治期の欧米における日本観、日本における欧米観への考察を深めるねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、近代における日本の異文化理解、国際交流の概要をワークシート等で理解させる。また、博覧会を描いたワークシートでその様子を概観しておく。本時では、殖産興業の性格とともに、帝国主義的側面が見え始めたり、娯楽としての要素が多くなった1970年の東京勸業博覧会を取り上げる。そして、当時のマスメディアを通じて、博覧会の意義を、その歴史的経緯、日本の国内状況、国際関係等と関連させ理解させるとともに、博覧会の国際交流に果たした役割について理解させる。さらに、博覧会の帝国主義的側面を通して、列強及び日本の対外政策における博覧会の位置づけに着目させるとともに、日本の近代化の意義を考察させる。第3時限では、博覧会の会場となった上野公園の地域調査を行い、上野地域に対する理解を深めるとともに国際交流の様子を実感させる。新学習指導要領では、「日本史A」の「(4) 近代日本の形成と展開」の「ウ 近代産業の発展と国民の生活」、「日本史B」の「(5) 近代日本の形成とアジア」の「ウ 国際関係の推移と近代産業の発展」で扱う。

(3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・万国博覧会の歴史	○1851年の第1回ロンドン万博から、1904年のセントルイス万博までの歴史を概観し、万博やその会場である都市そのものが巨大なメディア装置であることを理解する。	・資料「パンチ誌」など ・ワークシート
展 開	・内国博覧会 ・東京勸業博 ・日本の万博への参加 ・万博の帝国主義的側面	○1877年の第1回内国勸業博覧会から1907年の東京勸業博覧会までの歴史を概観し、欧米の科学技術の摂取の様子を理解する。また、第1回内国博に出品したレンガ工場から明治期の殖産興業の一端を知る。 ○新聞や錦絵等から東京勸業博覧会の様子を知り、その多様な性格や後世に与えた影響を理解する。 ○ヨーロッパに与えたジャポニスムや、ウィーン万博の報告等から日本の万博の受けとめ方を知り、当時の国際文化交流の様子を知る。 ○万博における各国の植民地展示や日本の内国博での台湾館、アイヌ館などの展示から、博覧会の帝国主義的側面を理解する。	・ワークシート ・郷土博物館のパンフレット ・資料「真美人草」 ・博覧会のパンフレット ・パリ博の絵葉書 ・ワークシート

ま と め	<p>・日本の近代化に対する外国人の評価</p>	<p>○近代化以前のゴロウニン、オールコックの日本に関する著作と、明治末の孫文、ネールの日本についての著作を通して日本の近代化に博覧会が果たした役割や日本の近代化の意義を考察する。</p>	<p>・ワークシート</p>
-------------	--------------------------	--	----------------

- (4) 評価の観点 ①19世紀後半の国際交流や社会状況などを通して、博覧会の意義及び影響を理解できたか。②台湾館や遊戯施設等が登場した東京勸業博の様子から博覧会の多様な性格を理解できたか。③博覧会の役割が、帝国主義と表裏一体となっていることが理解できたか。④日本の近代化に対する外国人の評価を対比して見ることで、日本の近代化の意義や在り方を多面的に理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①素描、錦絵、写真などの資料を効果的に活用して、生徒が主体的に考えられるように配慮する。②博覧会の娯楽的側面だけに着目しないよう留意する。③日本の近代化を一面的、肯定的イメージのみで捉えないように留意する。

3. 日本の近代化の過程にみる上野公園

- (1) 教材として取り上げた理由 江戸時代、上野東照宮、東叡山寛永寺などの堂宇の林立した上野の山は、江戸町人の遊山の場として賑わいを見せた。明治期の近代化の進展の中、オランダ人医師のボードワンの提言により、日本初の西洋風公園として上野公園が造られ、園内には、皇室博物館（現在の東京国立博物館）や帝国図書館（現在の国会図書館上野支所）など欧風建物が建てられた。また、園内では、しばしば内国勸業博覧会が開かれ、科学技術、産業、生活様式などの西欧文化が紹介され、多数の国民の人気を集め、賑わった。そこで、明治期日本への西欧文化流入の窓口となった上野公園を事例として取り上げ、明治期の日本の近代化に果たした役割を理解させるとともに、明治期日本の近代化の様子についての認識を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時では、明治期の近代化の過程における上野公園を、江戸時代及び現代と比較し、西洋文化流入の様子を認識させ、同時に、歴史的視点や国際交流の観点から、上野の地域社会について考察を深める。本時4時間構成の第4時限にあたる。第1時限では、ビゴーの素描を通して明治期の日本の姿を理解させる。第2時限では、上野地域の歴史を理解させ、また、上野公園の建造物の見学のポイントなど上野公園の地域調査の文献調査を行う。第3時限では、ビデオの活用やプリント資料への調査事項の記入などにより、上野公園の地域調査を行う。新学習指導要領は、「日本史B」の「(8) 地域社会の歴史と文化」で扱う。

(3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・上野高校周 辺について	○地図により、上野高校が江戸時代、寛永寺の子院 護国院の敷地（墓地）であったことを知り、現在の 上野高校周辺との環境の違いを比較する。 ○ボードワン博士が、上野山内を公園にすべきと政 府に建議したことを知る。	・資料、ワークシ ートの配布 ・ビデオ「上野公 園にあるボードワ ン博士像」
展 開	・明治時代の 上野公園 ・上野公園と 異文化理解	○江戸時代の上野の山周辺と明治時代の上野公園と の建造物などの違いを絵や素描、ビデオから理解し 西欧文化の影響を知る。 ○ペリーの「日本遠征記」にある下田混浴の絵と、 黒田清輝の「朝妝」を対比し、女性の裸体に対する 価値観の違いについて考察することを通して、西欧 文化について認識を深める。また、現代における黒 田清輝の評価を考える。 ○森鷗外の旧居のビデオ画面や小説「舞姫」のもと になった彼の体験などから、明治期における知識人 の西欧理解について考える。 ○上野公園で博覧会がしばしば開かれ、観覧車、ウォ ータースライダーなど西欧文化が紹介され、上野公園 が西欧文化流入の窓口になっていたことを知る。 ○西欧文化の導入とは対照的に、日本の伝統文化が 喪失されたことについても理解する。	・資料及びビデオ の提示 ・写真「黒田記念 室内部」 ・資料「下田混浴 の絵」「朝妝」 ・ビデオ「森鷗外 旧居」 ・小説「舞姫」 ・資料「上野公園 と博覧会」
ま と め	・近代化の過 程における上 野公園	○近代化の過程における上野公園についてまとめる ことを通して、異文化理解とは何か、国際交流とは 何かについて考察する。	・ワークシートの 提出

(4) 評価の観点 ①自分たちの学校や上野の地域について愛着がもてたか。②明治期の近代化の過程において上野公園の果たした役割について理解が深められたか。③上野公園に関する資料や公園の建造物を通して、明治期の近代化の様子について理解できたか。

(5) 指導上の留意点 ①明治期の上野公園への西欧文化流入について、写真・ビデオなどを活用し、具体的イメージを持たせるよう配慮する。②日本文化との比較を通して、西欧文化についての理解を深めるよう配慮する。

4. 明治の日本と日本人を描いたフランス人画家・ビゴー

- (1) 教材として取り上げた理由 フランス人画家・ビゴーは、浮世絵に象徴される日本の民衆文化に憧れ、浮世絵や日本画の画法を学ぶため、1882年に来日した。ビゴーは、18年間にわたる日本での滞在中、鹿鳴館などに象徴される欧化政策を猿真似と批判し、浮世絵が描いた市井の人々の生活を哀惜を込めて描いた。ビゴーの素描は、写真や映画などが未発達な時代において、急速に西欧化する明治期の日本と日本人を描いた貴重な記録であり、また、日本の民衆生活や文化の価値に対する、西欧における評価として大きな意義をもつ。そこで、ビゴーの「日本素描集」、「続日本素描集」を事例として、欧化政策が進展する明治期の日本の生活文化の様々な様相を理解させるとともに、西欧における日本観の一例として考察させることを通して、日本の伝統的民衆文化への認識を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は全4時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、ワークシート等により、明治期における異文化理解や国際交流の概要について認識させる。第3時限では、ビゴーの来日の契機となった、浮世絵をめぐる明治期における日本と西欧との交流について理解させる。第4時限では、上野公園の地域調査を実施し、実際に浮世絵を鑑賞する等の活動を通して、日本の近代化の過程における西欧との交流について、理解を深めさせる。本時では、ビゴーが日本でどのような生き方をしたか、ビゴーが明治の日本と日本人をどのように描いたか、ビゴーの「日本素描集」と「続日本素描集」を題材として、文明開化期の日本社会について考察させる。また、「西欧への崇拜」「賛嘆」「尊敬」への象徴として、鹿鳴館で繰り広げられた舞踏会と、伝統的な日本の民衆文化の象徴としての芸者との関わりに着目させることを通して、一外国人画家の目に映った文明開化の日本社会の一断面について理解させる。新学習指導要領では、「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」で扱う。
- (3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・ビゴーの人物像と来日(1882年)の目的	○18年間日本に滞在し、日本人女性と結婚して、一子をもうけたビゴーの人物像や浮世絵の世界に憧れ、日本美術の神髄にじかに触れて学びたいと決意してやってきた、来日の目的について理解する。	・ワークシートの配布 ・資料「ビゴーの来日」
展 開	・鹿鳴館と欧化政策 ・ビゴーの批判	○ビゴーの滞日期間が、鹿鳴館に象徴される、急速な近代化や文明開化が進展する時代であったことを理解する。 ○ビゴーが、宴会にうつつを抜かし、賄賂を受け取り、鹿鳴館でワルツを踊って西洋人の猿真似をしている高級官僚を批判していることを理解する。	・資料「鹿鳴館と欧化政策」 ・ワークシートの作成 ・資料「ビゴーの批判」

展 開	・ビゴアの日本における生き方	○ビゴアが日本に溶け込んで暮らそうとし、外国人居留地を出て麹町や市ヶ谷に住み、また、日本語を習い、着物を着て下駄をはいて生活していたことを理解する。	・資料「日本の生活」
	・ビゴアと日本の民衆との交流	○ビゴアが、近代化や文明開化とはあまり縁のない民衆との交流のなかで、民衆の姿を描いたおびただしい数の素描を残したことを理解する。	・資料「ビゴアの交流」
	・ビゴアの離日（1899年）とその背景	○ビゴアが自由民権運動や外国居留民の要求を無視して、近代化へとひた走る指導者層を批判し続けたために、官憲の弾圧に直面し、日本を離れたことを理解する。	・資料「ビゴアの離日」
ま と め	・異文化理解や国際交流の在り方	○ビゴアの日本における生き方や民衆との交流のなかで描いた素描などから、異文化理解や国際交流の在り方について理解を深める。	ワークシートの作成

- (4) 評価の観点 ①浮世絵、日本画など日本の伝統文化を愛したビゴアが、鹿鳴館に象徴される欧化政策に対して、批判的であったことを理解できたか。②ビゴアの作品が、日本の民衆との交流の中から描かれたことを理解できたか。③ビゴアが、日本語を学習する等、日本の民衆に溶け込み、日本の民衆文化を肌で感じとろうとしたことを理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ビゴアの作品の理解にあたっては、視聴覚機器などを有効に活用するとともに、取り上げる作品を精選することを通して、指導内容の精選構造化をはかるよう配慮する。

5. 近代ジャーナリズムの成立とその影響

- (1) 教材として取り上げた理由 情報化が進む現代の社会においてジャーナリズムの果たす役割は極めて大きい。我々は新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど様々なマスメディアからもたらされる情報の中で生活し、各種マスメディアからの情報が政治・経済・文化など多くの分野に大きな影響をもたらしている。現代のジャーナリズムの基本構造は、幕末の開国から明治時代にかけて日本に滞在した、欧米の外国人ジャーナリストの大きな影響を受け形成された。彼らは、急速に近代化していく日本の様子を、政治事件のみならず、風俗・習慣など様々な面から論評した。そこで、明治期、日本で活躍した外国人ジャーナリストの活動を通して、日本における近代ジャーナリズムの成立を理解させるとともに、欧米の人々の眼に映った日本の近代化の在り方についての考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は4時間構成の第3時限にあたる。本時では、在日外国人ジャーナリストであったワグマンとビゴアの素描を題材として、外国人ジャーナリストのわが国での活動や彼らの活動がわが国のジャーナリズムの発展に与えた影響について理解させるとともに、彼らがわが国の近代化をどのようにとらえていたかを理解させる。第1時限では、班

ごとに近代史における日本の異文化理解、国際交流の概要をワークシート等で理解させる。第2時限では、近代ジャーナリズムの発展の概要について理解させる。第4時限では、わが国の近代化の舞台の一つとなった上野公園の地域調査を通して、日本の近代化の過程における国際交流について考察させる。新学習指導要領では、「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」で扱う。

(3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・外国人ジャーナリストの活躍	○開国により多くの外国人が来日し、居留地で初めて新聞が発行されたことに着目する。 ○来日した外国人ジャーナリストは、政治事件のみならず、風俗・習慣・風景など色々なものに興味を持ったことを、ワーグマンの素描を通して理解する。	・絵「ワーグマン素描集」
展 開	・日本の近代ジャーナリズムの成立への外国人ジャーナリストのかわり ・外国人ジャーナリストが見た日本の近代化	○外国人ジャーナリストの影響を受けて、日本でも新聞が発行されるようになったことを理解する。 ○政府の新聞弾圧のなかで、治外法権の特権に守られた外国人ジャーナリストが諷刺画、諷刺文で権力を批判していたことについて考える。 ○政府の御用新聞的要素が強かった日本のジャーナリズムが、次第に権力批判を外国人ジャーナリストから学び継承したことを理解する。 ○ワーグマンの影響を受けて、「ポンチ絵」と呼ばれる諷刺漫画や諷刺似顔絵が流行したこと、また、ワーグマンやビゴーなどの影響を受けて日本人の諷刺画家が活躍したことを知る。 ○ワーグマン・ビゴーらの外国人ジャーナリストが日本の風俗・習慣などを題材とした素描集や諷刺雑誌を出版したり、日本の新聞・雑誌に発表したりしていたことを知る。 ○急速に近代化していく日本の様子や政府の対外政策が、外国人ジャーナリストの眼にどのように映ったかを当時の国際情勢を通して考察する。 ○在日外国人ジャーナリストの素描の変化を通して、彼等の日本に対する見方の変化について考察する。	・年表「近代ジャーナリズムの発達」など ・絵「ワーグマン・ビゴーの素描集」、「团团珍聞」など ・絵「ワーグマン・ビゴー素描集」 ・絵「ワーグマン・ビゴー素描集」

まとめ	・外国人ジャーナリストが果たした役割	○日本の近代ジャーナリズムの発展に、外国人ジャーナリストが果たした役割についてまとめる。	
-----	--------------------	--	--

- (4) 評価の観点 ①外国人ジャーナリストの活動が、わが国のジャーナリズムの発展に与えた影響を理解できたか。②ワグマン・ビゴの素描を通してわが国の近代化が外国人ジャーナリストにどのように映ったか、また、わが国の対外政策についてどのような危惧を抱いたかを理解できたか。③明治期のマスメディアに対する理解が深まったか。
- (5) 指導上の留意点 ①生徒が興味を持ち易い素描を利用し、生徒が主体的に考えられるように配慮する。②年表や地図を活用して、当時の時代背景を理解できるよう配慮する。

Ⅱ 民族共存への取り組み

1. パレスチナにおける共存の試み

- (1) 教材としてとりあげた理由 米ソの冷戦終結以後、民族問題に起因する紛争が多発している。しかし、解決に向けた動きを示すものはあまりにも少ない。パレスチナ問題は、歴史的にも40数年を経過し、石油危機をはじめ日本とも深く関係している。また、1993年のイスラエルPLOとのパレスチナ暫定自治協定調印以後、パレスチナでは共存に向けた動きが始まっている。その共存の在りかたについては賛否両論あるが、共存を指向する行動としては意味あるものである。そこでパレスチナ問題を事例として、民族問題における政治・経済的な背景や、その歴史が醸成してきた民族感情の複雑さを認識し、民族間の相互理解と協力援助などの共存を考察させることをねらいとして、本教材をとりあげた。
- (2) 本時のねらい 本時は2時間構成の第2時限にあたる。第1時限では建国から現在までのイスラエルと周辺のアラブ諸国、パレスチナ難民との対立・抗争など、パレスチナ問題の理解を深めさせる。本時では、パレスチナ民族意識をパレスチナ人青少年の意識調査から理解させるとともに、イスラエルの教科書、日本人のイスラエル滞在記、イスラエル占領地域の入植者の言葉などから、イスラエル人の民族意識とパレスチナ問題についての意識を考察させることを通して、解決の困難さと複雑さを認識させるとともに、民族問題の解決にむけた方向性を考えさせる。新学習指導要領では、「世界史B」の「(7)現代の課題」の「ア 国際対立と国際協調」で扱う。

(3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・パレスチナ 人とイスラエ ル人の感情	○1993年のパレスチナ暫定自治協定調印後のパレスチナ・イスラエル両首脳の写真の表情から、パレスチナ問題の複雑さと、解決の困難さに着目する。	・資料「新聞の写真」
展 開	・前時の復習 ・パレスチナ 人の民族意識 ・イスラエル 人の民族意識 ・現状への認 識と民族問題 解決への試み ・暫定自治協 定	○パレスチナ問題の基本的な対立の構図を考える。 ○パレスチナ人青少年の民族意識にはイスラム教などの宗教的なアイデンティティーではなく、故郷を追われた者としての意識がその中心に存在すること、また、かれらの目的が主権の回復であることを理解する。 ○シオニズムを理解し、また、イスラエル建国についての、イスラエルの主張の正当性と独善性について考える。 ○宗教国家としてのイスラエルの現実を考え、その宗教性の強さを考える。 ○イスラエル人の民族意識には、ユダヤ教より、シオニズムから続く民族の独立と祖国保持の思想が強いことを理解する。 ○パレスチナ・イスラエル両民族の意識から、両者に存在する越え難い心理的な壁を認識するとともに、この心理的な壁を乗り越えるためには、感情ではなく、冷静な判断力が必要なことを考察する。 ○民族の共存を図るには、お互いの譲歩、現状容認への妥協、お互いの存在を認めあうことが大切であることを認識する。 ○1993年の自治協定合意にいたる困難さと、その歴史的意義について考える。	・発問 ・資料「パレスチナ人青少年への意識調査」 ・資料「イスラエルの教科書」 ・資料「イスラエル滞在記」 ・資料「イスラエル人の国家観」 ・資料「自治協定合意以後の入植者の考え方」 ・絵「パレスチナ難民の子供」 ・発問と意見交流 ・資料「暫定自治協定」
ま と め	・民族問題の 複雑さと、共 存への可能性	○パレスチナ問題に存在する感情的な対立の深さを認識することを通して、民族問題解決における心理的な側面の重要性を考える。	・用紙の配布

(4) 評価の観点 ①民族問題には政治・経済的な諸要因がからみ、また歴史的に醸成された感情の対立がその根本に存在していることを理解できたか。②協定合意に至るまでの過程を通し、共存に向かって困難を乗り越えた人々の行動を理解できたか。③国際化が進む今日の日本において、民族問題を自分自身の問題として認識する意義について理解できたか。

- (5) 指導上の留意点 ①歴史的背景と関連させ、パレスチナ問題を理解させるように配慮する。②資料や発問により、民族問題に内在する感情の対立に関心をもたせるとともに、自分自身の問題としてとらえさせるように配慮する。

2. 人種共存社会 -南アフリカ共和国を事例として-

(1) 教材として取り上げた理由 今日の世界は、人種・民族・宗教などに起因する地域紛争が激化している一方で、EU（ヨーロッパ連合）の結成など国民国家の枠組みがゆらぎ、新たな試みが模索されている。南アフリカ共和国では、1991年のアパルトヘイト関連法の廃止、また、1994年のマンデラ大統領の就任により、白人支配体制が終焉し、多人種共存というアフリカ史上初の試みが始まった。そこで、南アフリカ共和国における人種問題を事例とし、アパルトヘイト（人種隔離政策）の政治・経済的背景及び崩壊について理解を深めさせるとともに、同時代史として進行しつつある多人種の地域内共存について認識させることを通して、世界の人種や民族問題の解決について考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第3時限目にあたる。第1時限では、アパルトヘイト成立の経緯とその特徴について理解させる。第2時限では、アパルトヘイト崩壊への過程とその理由について考察させる。本時では、新聞記事を利用し、1994年5月のマンデラ大統領就任という劇的な変化をもたらした背景と選挙に臨んだ各階層の人々のそれぞれの考えを理解させる。また、多人種共存をめざす新体制とRDP（復興開発計画）などの今後の課題について、考察させる。新学習指導要領では、「世界史A」の「(4)現代世界と日本」の「エ 地域紛争と国際社会」、 「世界史B」の「(7)現代の課題」の「ア 国際対立と国際強調」の中で、主題学習として扱う。

(3) 展開例

	学習事項	学習内容	備考
導 入	・選挙から新体制の発足までの足どり	○新聞記事を参照し、1994年4月～5月の制憲議会選挙からマンデラ内閣の成立までの年表を作成する。	・資料「年表（新聞ノート）」 ・ワークシート
展 開	・暫定憲法の内容 ・選挙結果 ・階層による様々な考え	○1993年12月に成立した暫定憲法の内容を新聞記事により理解する。 ○選挙結果を示す記事を参照し、選挙に参加した政党名や獲得議席などをプリントに記入し確認する。 ○南アフリカ共和国の様々な階層の人々の考えを発表し、理解する。 ①選挙直前、選挙の実施を妨害する動きにどんなものがあったか。	・資料「新聞記事」 ・新聞「選挙結果」 ・各自の「新聞ノート」のまとめの内容を発表させる。

展 開	・マンデラ政権をめざす方向	<p>②インカタ自由党（IFP）とはどういう政党か、また、選挙ボイコットの方針が一転して参加へと変わったのはなぜか。</p> <p>③自由戦線（FF）など白人保守派を構成するのはどういう人種で、自由戦線の主張は何か。</p> <p>④民主党、パンアフリカニスト会議はどのような階層の考え方を代表している政党か。</p> <p>⑤今回の選挙での国民党の主張とは何か。</p> <p>○アフリカ民族会議（ANC）の選挙候補者、マンデラ氏の講演や閣僚の構成から、新体制の全人種共存への試みを理解する。</p>	・「新聞ノート」
ま と め	・新体制の今後の課題	<p>○ANCの選挙公約であるRDP（復興開発計画）の内容とその実施のための問題点を、記事から読みとり、その実施の可否が新政府の政治的課題であることを理解する。</p> <p>○長い間の対立・構想による諸階層の強い対立感情が共存を困難にさせていることを理解し、対立感情の克服について考察する。</p>	・「新聞ノート」 「ワークシート」

- (4) 評価の観点 ①暫定憲法成立後の選挙実施に伴う様々な事件を通して、各階層の人々の意識を理解できたか。②南アフリカ共和国における多人種共存の試み、また、ANCの選挙公約であるRDP（復興開発計画）などを通して、今後の課題について考えることができたか。③選挙結果やマンデラ政権の政策内容について、新聞記事の中から必要な情報を取捨選択することができたか。④新聞記事に親しみ、同時代史としての現代の国際問題に興味・関心をもつことができたか。

- (5) 指導上の留意点 ①事前に1994年4月～5月の南アフリカ共和国にかかわる全ての新聞記事を切り抜き、「新聞ノート」を作成させておくよう指導する。②事前に授業内容について問題を提示し、新聞記事を政治・経済などの分野ごとに分類させておくよう指導する。

3. ベルギーにおける民族共存

- (1) 教材として取り上げた理由 今日の世界は、民族対立などに起因する地域紛争が頻発する一方で、EU（ヨーロッパ連合）に見られるように民族を越えた国家間の統合も進展しつつある。近年、日本において多数の外国人が暮らすようになり、様々な課題が生じてきている。EUの構成国であるベルギーでは、フラマン・ワロン両民族の対立を克服し、互いの民族の共存への取り組みが見られ、EUの国家間統合の手本にもなっている。また、民族対立が激化している近年の国際社会で、民族問題解決に向けての意義ある取り組みである。そこで、ベルギーにおける民族共存の実情を事例として、民族共存のための政策等を考察し、複

族国家の民族問題についての認識を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

- (2) 本時のねらい 本時では、民族対立が起こらないための国内における地域割りを把握させ、また、それぞれの地域での言語の使用により、それぞれの民族の社会・文化が尊重されるようになったことを理解させることを通して、フラマン・ワロン両民族の共存のための政策等を考察させる。また、ルーヴェン大学がワロン地域に新たにキャンパスを新設、移転したことやブラバント州が分割されることなどの施策は、国家が分裂する一過程ではなく、両民族がお互いの立場、文化を尊重し合うためのものであることを理解させる。本時は「ベルギーの社会と生活・文化」の中で取り上げ、2時間構成の第2時限目で取り扱う。第1時限目では「複族国家ベルギーおよびベルギー史（民族対立の歴史）」を扱う。新学習指導要領では、「地理B」の「(2)人間と環境」の「ア 人種・民族と国家」で扱う。

(3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・複族国家における民族共存	○ベルギーが複族国家であること、また、ベルギー国家成立、及び2つの民族の対立の歴史を確認する。 ○フラマン・ワロン両民族が共存を求め合っていることに気づく。	・100ベルギーフラン紙幣 ・ワークシート配付
展 開	・言語政策の転換 ・連邦化による自治政策 ・民族共存のための取り組み	○第二次世界大戦後、フラマン・ワロンの人口比率が逆転し、1963年の言語法が制定され、オランダ語がフランス語と対等の地位になったことを知る。 ○1970年から4回の憲法改正を経て、自治が進められ、1993年に連邦国家に移行したことを理解する。 ○3つの地域政府（フランドル、ワロニア、ブリュッセル）の位置、政策分担の内容を理解する。 ○3つの言語共同体政府（オランダ語、フランス語、ドイツ語）の位置、政策分担の内容を理解する。 ○地方政府の自治化により、連邦政府が軍事・外交・司法政策のみ政策分担していることを理解する。 ○10の州がどの地域政府ならびに言語共同体政府に所属しているかをワークシートに作業する。 ○フラマン、ワロン両民族の相互理解・尊重への取り組みについての理解する。 ①国内最古のルーヴェン大学のフランス語系キャンパスの移転、新設がなされたことを知る。 ②各言語地域では、現地の言語が使用されるのが原則で、首都のブリュッセルだけが二言語併用されている理由について理解する。	・表「ベルギーの民族別人口数」 ・ワークシート ・地図「ベルギーの言語地図」

展 開		③フランドル・ワロニア両地域政府にまたがるブラバント州が、民族共存のために、1995年に南北に分割されたことを理解する。	
ま と め	・連邦国家ベルギーの将来	○ベルギーが連邦国家になったのは、国家が分裂していく一過程ではなく、両民族がお互いの立場を尊重しあうためのものであることを理解する。 ○ベルギーは、ラテン・ゲルマン両民族の統合したEUの縮図であり、EUの国家間統合の手本になっていることを認識する。	・地図「ヨーロッパの民族分布地図」

- (4) 評価の観点 ①ベルギーではフラマン・ワロン両民族に大幅な自治が与えられ、3つの政府が政策分担している連邦国家であることが理解できたか。②フラマン・ワロン両民族が互いの文化的価値を認め合っていることを通して両民族の立場の尊重について理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①ワークシートの地域割りの作業に深入りしないよう配慮する。②フラマン地域には、フラマン系住民の他、ワロン系住民も少数住んでいること、また、その逆の場合もあることに配慮する。

Ⅲ 地域の文化的特性の考察

1. フィリピンの食文化 -異なる食文化の受容-

- (1) 教材として取り上げた理由 日本文化は、歴史的に見ると、中国文化や西洋文化など世界の多様な文化の流入の影響を受け形成されてきた。また、日本的仏教・儒教、日本的西洋文化と称されるように、日本文化のアイデンティティを保持しつつ、異文化を受容し、かつ変容させ、日本特有の文化的特性を作ってきた。同様に、世界の各地域において、地域固有の文化と異文化との融合した、地域の文化的特性が見られる。例えば、フィリピンでは、中国との交易やスペイン・アメリカの植民地という歴史的背景の中で、中国、スペイン、アメリカ文化の影響を受けた特有のフィリピン文化を形成している。そこで、フィリピン文化を事例として、その文化的特性の形成の様子を食文化の形成を通して、理解させるとともに日本など世界の各地域の文化的特性への認識を深めさせることにより、異文化に対する寛容な心を育成することをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第1時限である。身近な素材であるフィリピン人の食べ物を通して、フィリピンへの異文化の流入の歴史を理解させるとともに、フィリピン人の生活に対する興味・関心をもたせる。第2時限では、食べ物と自然環境との関係、また、食べ物を通して異なる社会階層の存在や地域的特色を知る。第3時限では、食事への招待から見た人づき合いの仕方や「恥」といったフィリピン人の価値観を知る。新学習指導要領では、「地理A」の「(2)世界の人々の生活・文化と交流」の「イ 諸民族の生活・文化と地域

まとめ	・自分たちの食生活と比較	○フィリピンの食文化の特徴、自分達の食文化との共通点をワークシートにまとめる。	
-----	--------------	---	--

(4) 評価の観点 ①様々なフィリピン料理を通して、フィリピンが多くの国々の食文化を受容していること、また、その歴史的背景が理解できたか。②日本の食文化との比較を通して、その共通点に気付いたか。③フィリピン料理の写真から、フィリピンの食文化を積極的に読み取れたか。

(5) 指導上の留意点 ①生徒が、写真から学習内容を発見し活用できるよう、写真提示の構成を工夫する。②フィリピンの食文化の地方的特殊性だけでなく、日本の食文化との共通点も考えさせ、世界における生活・文化の同質化に気付かせるよう配慮する。

2. 「世宗」の事績 —ハンゲル（創民正音・大いなる文字）創製を中心にして—

(1) 教材として取り上げた理由 今日の世界は、政治・経済・文化などにおける国際的相互依存関係を一層深めており、日本においても、世界の国々との真の文化理解に基づく相互交流が強く求められている。特に隣国の大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国との間においては、伝統文化の尊重や文化的価値観の受容などを通じた、密接な相互理解がますます期待されている。文字は民族文化や文化的価値の象徴であるといわれる。朝鮮半島にあっては、長い間、独自の文字を創製できなかったが、15世紀に登場した李氏朝鮮の世宗により、はじめて、朝鮮半島独自の文字であるハンゲルが創製された。そこで、世宗によるハンゲル創製の経過に着目させ、また、文字の形、仕組みなどハンゲルの特色を通して、朝鮮半島の文化的特性を考察させるとともに、異文化に対する認識を深めることをねらいとして、本教材で取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は6時間構成の第5時限にあたる。第1時限では「明の成立と発展」を、第2時限では「清の成立と繁栄」を、第3時限では「明清の経済文化」を、第4時限では、「李氏朝鮮の成立、政治の動き全般」を、第6時限では「日本、ベトナム」を学習する。本時では「世宗」の事績、特にハンゲル創製の経過、仕組み、国民の反応について理解させるとともに、文字は民族文化そのものであることを認識させる。新学習指導要領では、「世界史B」の「(2)東アジア文化圏の形成」の「ウ 中華帝国の繁栄と朝鮮、日本」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・ハンゲルについて	○朝鮮半島では「漢字」や「日本語の仮名」と異なる文字が使われていること、また、この文字は李氏朝鮮時代に作られたことを知る。	・資料「ハンゲルの新聞」
展 開	・「世宗」について	○「世宗」の事績の歴史的意味を考える。 ①韓国の1万ウォン札の世宗の肖像 ②ソウル市中心の官庁街の世宗路の名称	・OHC ・世宗に由来するものの例示「紙幣」

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・「世宗」の事績（1418～50） ・ハングル創製の目的 ・ハングル創製の経過 ・ハンゲルの特色 ・ハングルに対する反響 ・ハンゲルの使用の一般化 	<p>③旧暦9月29日・新暦10月5日の文字の日</p> <p>○「世宗」の多岐にわたる事績を理解する。</p> <p>①倭寇の撃退について</p> <p>②金属活字の発明について</p> <p>③測雨器・日時計など、気象観測器具について</p> <p>④宮廷雅楽の完成について</p> <p>○新文字ハングル創製の理由や目的を理解する。</p> <p>①漢字では、自国語を全て表記できなかったこと</p> <p>②国内における識字率が、あまり高くなかったこと</p> <p>○極秘作業で世界中の文字を分析し、形は平易で学問上の意味付けが必要とされたことなど、13人の学者たちのハングル創製に至る困難な経過について理解する。</p> <p>○平易なこと、母音と子音の組み合わせ、形の由来などハンゲルの特色を理解する。</p> <p>○保守派の両班層が、文字を知る特権を失うことを恐れ、ハングルを「仮の文字（オンモン）」とさげすみ中国文化を尊敬し、抵抗したことを理解する。</p> <p>○国民に使用されるまで、また、1894年に「ハングル」という正式名称を獲得するまでには長い年月が必要だったことを理解する。</p>	<p>「ソウルの写真」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料「朝鮮の歴史の挿絵」 ・資料「訓民正音の序文」 ・資料「朝鮮の歴史の挿絵」 ・資料「反切表」 ・生徒たちに自分の氏名をハングルで書かせてみる。 ・OHC
	ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・「世宗」の事績の確認 ・文字について <p>○中国の漢字文化の影響を受けた東アジアの国々では、自国の文字を持つことが中国文化の影響からの自立であり、自国文化のアイデンティティの確立でもあったことを理解する。</p> <p>○日本の「仮名文字」も日本固有の「文化」であることを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「中国周辺民族の文字と漢字文化圏」

- (4) 評価の観点 ①「世宗」の事績について理解するとともに、新文字を創製しようとした理由が理解できたか。②ハングル創製の学者たちの苦勞、両班層の冷淡な反応を理解できたか。③実際に氏名をハングルで書くことを通して、ハンゲルの合理的な仕組みを理解するとともに、興味・関心を持てたか。④「文字」は国の文化的特性を現すことが理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①図説や地図を効果的に活用し、中国・朝鮮・日本の位置、歴史的関係について具体的に確認させる。②ハンゲルの仕組みについての資料説明は、深入りをしないように留意する。

3. 近代の北海道とアイヌ民族 —明治政府による同化政策—

(1) 教材として取り上げた理由 1993年の国連の国際先住民年、1994年から始まった世界先住民の国際10年などを契機に、文化の独自性の保持など、先住民の自主的権利を尊重することの大切さが、世界の国々においてあらためて問い直されている。日本におけるアイヌ民族は、独自の宗教及び言語を保存し、また独自の文化を保持した少数民族として認められている。しかし、明治に入り、明治政府により日本国民への同化政策が行われた。そこで、明治政府による開拓政策の中でのアイヌ民族に対する同化政策や土地収奪などに着目させ、その独自の文化や伝統などを理解させるとともに、明治時代以前の北海道における地域の文化特性への考察を深めることを通して、アイヌ民族に対する正しい認識を深め、差別や偏見をなくしていくことをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は2時間構成の第2時限にあたる。第1時限の「北海道の開拓」では、中世・近世におけるアイヌの人々の歴史の知識などについても理解させる。本時では、明治新政府の北海道開拓政策の進展にともなって、アイヌの人々の生活がどのように変化していったかを理解させ、なかでも北海道旧土人保護法が、アイヌの人々の生活を保護するという反面、狩猟・漁撈民のアイヌ民族に農耕を奨励して、日本国民に同化していくものであったことを認識させる。新学習指導要領では、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」で扱う。

(3) 展 開 例

	学 習 項 目	学 習 活 動	備 考
導 入	・少数民族としてのアイヌの人々	○1993年の国連の国際先住民年、世界先住民の国際10年（1994年から10年間）など、現在、先住民の問題が世界的に注目されていることに着目する。 ○アイヌの人々は、文化の独自性を保持する少数民族であることを確認する。	・地図「北海道に残るアイヌ語の地名」
展 開	・領土交渉とアイヌ民族 ・明治政府による同化政策	○江戸幕府はロシアとの領土交渉において、アイヌ民族を「日本に属する民」としたことを理解する。 ○明治政府は、北海道開拓の進展とともに、アイヌ民族に対する同化政策を次々と展開していったことを具体例を挙げながら理解する。 ①自家焼却や男子の耳環、女子の入墨の禁止などアイヌの民族習慣・文化の否定 ②仕掛け弓、サケなどの川漁や鹿猟の禁止など、狩猟、漁撈生活の否定 ③戸籍法（1871年）にともなう「平民籍」への編入と「旧土人」の呼称（1878年～）など、アイヌの人々に対する差別的扱い	・資料「日露交渉内容」 ・写真、絵、ビデオ「アイヌ文化を学ぶ」

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道旧土人保護法 ・教育による同化政策 	<p>○北海道旧土人保護法は、狩猟・漁撈民のアイヌ民族を農耕民化するものであったことを理解する。</p> <p>①1877年の北海道地券発行条例によって、アイヌの人々の居住地はすべて官有地に編入（「アイヌモシリ」の否定）</p> <p>②1899年の北海道旧土人保護法の公布・施行（給与地などにみられる差別的扱い）</p> <p>○アイヌ民族と和人の小学校教育を区別した、旧土人児童教育規定（1901年）は、アイヌ語の禁止など同化政策が目的であったことを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「旧土人保護法」 ・「ドーズ法」との関連に注意する。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ文化の尊重 	<p>○アイヌ民族に対する明治以降の同化政策について理解する。</p> <p>○アイヌ新法（仮称）を通して、アイヌ民族の主張について知る。</p> <p>○宗教・言語などの独自性を有するアイヌ文化について考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「アイヌ新法（仮称）」

- (4) 評価の観点 ①明治政府の政策により、アイヌの人々の伝統的生活文化が失われ、日本国民に同化させられたことなどについて、その経緯を正しく理解できたか。②アイヌの人々や文化に対する関心や尊重する態度が生れたか。
- (5) 指導上の留意点 ①アイヌ民族の伝統文化を日本の伝統文化と関連させることに配慮する。②ビデオや写真を効果的に利用し、アイヌ民族の習慣・文化などを実感的に理解させるように配慮する。

4. 東京における大正～昭和初期の生活文化 —ある俸給生活者の一日—

- (1) 教材として取り上げた理由 第二次世界大戦後の高度経済成長は、日本の国民生活を豊かにさせ、戦後日本の様々な大衆文化を生み出すとともに、中流意識に象徴される大衆社会を形成したといわれる。現在の大衆社会や大衆文化の原形は、大正から昭和初期に東京などの大都市において形づくられたと考えられる。サラリーマン層（俸給生活者）の創出、大衆社会や大衆文化の形成に大きな役割を果たしている新聞・ラジオなどのマスメディアの普及、活動写真・雑誌・流行歌などの大衆的娯楽の盛況、洋服や洋髪などの風俗の大衆的流行の芽生えなどが見られる。そこで、現代の大衆社会や大衆文化の原形が形成されていく大正から昭和初期の東京の生活文化を事例として、東京という地域の文化的特性に対する認識を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時では、昭和初期の東京の平均的俸給生活者を主人公として、その一日の生活を通して、生活用具をはじめ、生活の中に現れてくる生活文化の様相を、具体的かつ実感的に理解させるとともに、現在の大衆文化の原形や大衆文化を産み出す基盤となった

大衆社会の形成について認識させる。新学習指導要領では、「日本史B」の「(6)両大戦と日本」の「イ 政党政治の発展と大衆文化の形成」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学習活動	備考
導入	・主人公の紹介	○現代の平均的サラリーマン層の生活の原形が、大正から昭和初期の東京に生まれたことを知る。	・資料「生活文化史年表」
展開	・マスメディアの発達	○ラジオ体操と新聞の購読を通して、平均的な俸給生活者の朝の生活を理解する。 ○新聞、ラジオなどのマスメディアの発達を通して大衆文化形成の背景を理解する。	・音楽「ラジオ体操の歌」
	・東京における都市交通の発達と大衆的娯楽の盛況	○通勤ラッシュがはじまり、都心では盛り場が作られたことを理解する。 ①通勤に利用された交通機関について考え、その発達の様子を理解する。 ②銀座や浅草の様子を例に、大衆的な娯楽施設の発展を知る。 ③活動写真と流行歌の相乗効果を知る。	・OHC「東京の鉄道網の発達」 ・資料「交通機関別一日平均輸送量」 ・音楽「東京節」「東京行進曲」 ・写真「銀座、浅草」
展開	・洋服の普及	○銀座や浅草などの通行人の服装を通して、洋服の普及や当時の風俗の流行について理解する。 ○電灯の下での夕食風景などを通して、平均的俸給生活者の夜の生活を理解する。また、照明を当時の明るさにし、実感する。	・OHC「モガ」
	・電気、水道、ガスの普及 ・和洋折衷の食生活	①電灯、水道、ガスなどの新しい生活用品の登場 ②箱膳からちゃぶ台への食卓の変化 ③当時の三大洋食のカレー、コロケ、トンカツなど	・音楽「洒落男」 ・OHC「東京銀座街風俗記録」 ・資料「電灯、水道、ガスの普及状況」
まとめ	・大衆社会の成立	○東京の人口増加や娯楽、衣食住などにおける生活の均質化を通して、東京に大衆社会が成立していったことを理解する。	・資料「東京の人口増加」

(4) 評価の観点 ①昭和初期の娯楽、服装、生活用品、料理などを通して、当時の東京の生活文化を具体的かつ実感的に理解することができたか。②昭和初期の大衆文化の形成を通して、東京における大衆社会の成立を理解できたか。③現代の生活や文化について興味や関心を新たにすることができたか。

(5) 指導上の留意点 ①写真、音楽、実物などを有効に活用するとともに、指導内容はより具体的な素材を取り上げる。②「生活文化史年表」を適宜参照させるよう配慮する。

5. アメリカニズムの解説

- (1) 教材として取り上げた理由 現代の日本文化は、戦後一貫して「アメリカ化」し、文化や価値観がアメリカ的に変化したといわれる。確かに、日本とアメリカの消費文化は、表面的にはきわめて類似しているが、フロンティア精神や多民族社会を背景とした「フェアな競争意識」「経済合理性」「契約思考」などアメリカ社会の基層にある価値観は大きく異なる。そこで、流動的移民によりつくられた多民族社会の特質や費用便益的な経済合理性に基づく産業活動などへの理解を通して、異文化としてのアメリカを認識させることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は、「TVのCMからみたアメリカの企業運営と消費文化」とし、6時間構成の第6時限にあたる。第1・2時限では「多民族社会の形成」、第3・4時限では「アメリカンドリームの場合としての産業」、第5時限では「契約と訴訟社会」を扱う。視聴者の満足感を得るために高度に洗練されたTVのCM文化の中で、特に「比較広告」を素材とし、アメリカの経済文化の中心的価値観である「市場競争原理」と市場経済国家アメリカのもつバイタリティーを認識させるとともに、アメリカ社会の中でのメディアの役割にも関心を持たせ、日本への影響を考察させる。また、倫理コードや宗教の社会的影響力なども理解させる。新学習指導要領では、「地理A」の「(2)世界の人々の生活・文化と交流」の「イ 諸民族の生活・文化と地域性」、「地理B」の「(2)生活と産業」の「イ 産業の国際化、情報化と地域文化」で扱う。
- (3) 展開例

	学習項目	学習活動	備考
導入	・アメリカの消費文化の影響	○ジーンズやタバコ、清涼飲料水、酒のCFを通して日本の大衆消費文化へのアメリカの影響を知る。	・資料「タバコなどのCF」 ・MTVの映像
展開	・比較広告の背景 ・フェアな競争精神 ・独創性の評価	○日本、アメリカ共に市場経済に基づく国であるが何故、アメリカのCFでは「比較」が好まれるのかを日本で放送できなかったCFを見て考察する。 ○嫌われる日本的「安定」、好まれる「挑戦」(パイオニア精神)について、理解する。 ①紙おむつと母親改造などにおける技術革新とマーケティングによる市場創造 ②ダイエットコーラなどにおける訴求性の高いCMとセグメント化された消費者 ③パソコン市場などにおける独創性への尊敬と独占への反発を利用したCF ○独創性の育成など背景にあるフェアな市場経済などを理解する。	・ビデオ「運動靴のCF」 ・ビデオ「ペプシ・フィーリング編のCF」 ・資料「紙おむつの開発」 ・ビデオ「ペプシ社のCF(類人猿編)」 ・ビデオ「アップル社のCF(1984年)」

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・公共広告と選挙広告 ・アメリカ文化の影響力 	<p>○日本政府の利用などを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①性倫理、エイズ防止、薬物乱用防止など ②寄付のお願い、徹底した「比較」選挙広告など <p>○各国のCMへのアメリカ文化の影響についてグループで討議する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①中国、シンガポールなど途上国型CM ②フランス、イギリスなどのヨーロッパ型CM ③サントリー、ウールマークなどの日本型CM 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料ビデオ ・評価用資料「キャンペーン型・イメージ型・ムード型など」
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・日米CF文化の差異 	<p>○日本へのアメリカのCFの影響について、今後の討議の準備をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・討議用資料

- (4) 評価の観点 ①TVのCMは、制作・放送されている地域に応じて、異なる方法を用いることが実感できたか。②比較広告を通じて、経済文化の差異を理解し、日米経済摩擦の背景を理解できたか。③日本人の消費行動のアメリカ的側面と非アメリカ的側面に注目できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①TVのCMの資料の考察については、過度の一般化はさけ、生徒に具体的に読み取らせるよう、ワークシートを活用させる。②TV局が行う番組編成の指針、政府公報や公共広告における民族・宗教などへの配慮を通じて、アメリカ文化の寛容さなどアメリカ文化を多角的に理解させるよう配慮する。